欲望の力学――蔡萬植『濁流』（三枝壽勝訳　講談社）

『濁流』は日本の植民地支配にあった一九三〇年代の朝鮮の民衆の生活と感情を活写した長編小説である。この作品を四年を費やして翻訳した三枝壽勝氏は、当時の社会的背景がふんだんに盛り込んだ内容や文体が、現代の日本の読者に、受け入れられるかどうかという危惧を持つことを後記で語っている。

けれども訳者のその危惧は無用のものであったようだ。『濁流』は一編の民衆を描いた近代小説としての結構を充分に備え、文体の饒舌さも描写の卑俗さも、その内容に合致した生命感に満ちているからである。物語は地道な勤めができずに穀物相場での投機に熱中するものの、そこで金を稼ぐ才覚もない丁主事（チョンジュサ）の家族を軸とし、長女の初鳳（チョボン）の身の上に焦点を当てて語られていく。初鳳は思いを寄せる相手があったものの、両親の欲得によって不実な銀行員の元に嫁ぐが、間もなく夫は浮気の相手の夫に撲殺され、その際に初鳳は殺された夫の友人であった亨甫（ヒョンボ）という悪辣な男に犯される。その後以前勤めていた薬局の主人の囲われ者となって女の子を出産するものの、それが自分の子であると主張する亨甫が出現し、結局初鳳は亨甫の妻となる。しかしもとも と亨甫を憎悪している初鳳はその生活に到底安住することができず、最後には感情を爆発させて亨甫を蹴り殺してしまうのである。

訳者の三枝氏はこの展開が、文体の語り物的な饒舌さと密接に連関していることを重視し、それを捨象してしまえば「荒唐無稽なあらすじ」だけが残るという見方を示している。けれどもこの波乱に富んだ主人公の帰趨は、それ自体としても興趣に満ちており、また決して展開の合理性を逸脱した稚拙さを晒しているわけでもない。この小説が初鳳の身に託して示しているものは、人間が変容しうる振幅の大きさという、文学の普遍的な主題であり、それが初め内気で自分の思いをろくに語ることもできなかった主人公が、最後には悪辣な夫を蹴り殺す激情の主となる展開にあらわれている。それは英明な王と汚れた罪人を共在させた人間を、一つの筋の両端に位置づける『オイディプス王』以来の系譜につながる地平にある構造であるといってもよい。

また『濁流』は確かに日本の私小説の風土の対極を成す作品だが、そこに含まれる要素が日本文学に不在であるわけではない。運命の転変のなかで、次第に内側の荒々しさを浮上させていく女主人公の姿は徳田秋声の『あらくれ』を想起させ、また多くの人物によって担われる暴力への傾斜も、人間の抱えた野性の噴出を描く有島武郎の『カインの末裔』や、中上健次の一連の作品などに見出される。けれどもこれらの作品においては、野性の牽引は人間の他者性の浮上として意味づけられることが多く、また近代批判の寓意を帯びることも珍しくない。一方『濁流』の人物たちの暴力への傾斜は、功利社会に生きる人間たちの、欲求の直接的な表出の形にほかならず、そこに訳者の慮る日本文学の風土との距離が立ちあらわれている。しかしこの作品を支配する、ジラール的な鏡像性とも無縁な、端的で明快な欲望の力学に読み手は一種の爽快感を覚えずにいないのである。

（柴田勝二）